

くそうと、甲板の上で、南海の紺碧の海に向かって誓った。

日一日と寒くなってきた。昭和二十年十月二十九日、横須賀に上陸、二重砲連隊の跡で復員手続完了。同十一月三日、召集解除、翌四日夜、自宅に帰還した。

早速翌朝から近隣知己、友人にお礼の挨拶回りをした。出征前の農産業協同組合に復職して、すべて出征前のごとくになりました。近隣には、たくさんの戦死者の家があり、無事復員を大きな声で喜べない状況でした。戦死者に思いを馳せ、言葉を慎みました。その人の分もと復興には力を入れて働きました。

満州事変から

玉砕地マリアナの戦いまで

愛知県 川 嶋 正 巳

私は大正三（一九一四）年四月一日生まれ、昭和九

（一九三四）年一月十八日、豊橋の歩兵第十八連隊第一機関銃中隊に入りまして、昭和九年四月より、同十一年五月まで主として北部満州において満州事変に参加し、昭和十二年八月、歩兵第十八連隊第一大隊本部勤務となりました。

そして支那事変の後半、歩兵第十八連隊だけ第三師団から抜けるということになりました。

と申しますのは、第三師団は歩兵第十八連隊、静岡の歩兵第三十四連隊と第二十九旅団、名古屋の歩兵第六連隊と岐阜の歩兵第六十八連隊と第五旅団という四つの連隊と二つの旅団で編成されていましたが、第三師団から歩兵第十八連隊だけ手放した訳です。

この歩兵第十八連隊は昭和十七年七ころ、当時静岡の第二十九旅団の旅団長が歩兵団長となって、満州の常陽で編成された歩兵団に入った訳です。

こんなことで満州へ行きました。当時は平時編成で訓練を受けました。その前に、軍隊の中から士官学校へゆくという制度があり、命令を受けて試験を受け士官学校に一年ほどいて帰隊しましたが、さぼっており

ましたのでとはされて歩兵第五十連隊へ行けということになりました。この歩兵第五十連隊はどこにいるのかと聞きますと常陽でした。

第二十九歩兵団は、中支から行った歩兵第十八連隊と信州松本から来た歩兵第五十連隊と奈良の歩兵第三十八連隊の三つから編成され、その上に第二十九師団がありました、その常陽に師団司令部がありました。何のことはない、同じ師団の隣の連隊へ行ったということになります。

それで歩兵第五十連隊へ到着しましたら、連隊から貴官はどここの部隊へ行きたいかという話がありました、私は機関銃でありましたので私は「いやです」といいました。機関銃隊は戦争になると他の歩兵部隊に出されてしまう。そして機関銃隊は少ない兵力で戦わねばならない。みじめなことになる。反対に小銃中隊などにおりますと、そこへ機関銃小隊になり中隊をもらせる。大隊砲ももらえると、こうで総合的に戦力を發揮できるので「歩兵中隊へ行きたい」と言います

と、そんな考え方もあるか、と笑われまして、第七中隊に入りました。

そこへ行ってから、第二十九師団はマリアナ地区へ参りました。そしてサイパンへ歩兵第十八連隊、テナアンへ歩兵第五十連隊、歩兵第三十八連隊はグアム島という配備で任地へ着きました。

テナアン島で陣地を作っておりました時にどうもアメリカ軍の活動が活発である。マーシャル群島方面に八〇〇隻の艦隊、船舶が集まっているらしい、この情報があります、そのころ師団長はグアム島におり、歩兵第十八連隊などをグアム島地区へ入れようとしたのですが、前記米艦隊がどこへ行くか分からないというのでそのままの配置でおりました。ところがある時に米船団が急にどこかへ行ったという。当時は、おそらくポナペへ行ったのだらうということになって、部隊の編成、駐屯を変えるのはこの時だということになって、とうとう歩兵第十八連隊はグアム島へ、歩兵第五十連隊はロタ島へと移動命令が出ました。

この移動は六月七日に出て、六月十一日にグアム島行きということであった訳です。そして私はテナアン島からロタ島へ行く先発隊として出発しました。サイパンへ敵の進攻があった三口前に私はロタ島へ行き、部隊を受け入れる準備をしていた時に、サイパンの戦が始まって、そのまま帰る方法もなくロタ島の守備をすることにになりました。

当時ロタ島には、東京の歩兵の一個大隊がおりましたので、その指揮下に入り、最後までこのロタ島にいた訳です。結果的には生き残りました。

それでロタ島に着いた三日目に、米軍のサイパン作戦が始まったのです。米艦隊はボナベへ行つたとほとんどでもない、サイパンへ向かっていたので、どうしてもそれが分からなかったのか？ 鬼のいない中に急いでやれといって配置替えをしていたのですが、米軍が真っ直ぐに来ることを知らないで、そのような大胆なことをやったことになったのです。そういうことがありまして、私はロタ島で生き永らえてしまいました。原隊の第五十連隊はテナアンで玉砕しました。

第二十九旅団長が着任した時、上等兵以上を集めてつぎのような挨拶がありました。

「自分より階級の上の人を偉いと思うな。自分の味方には下は二等兵から大将まである。敵も同じだ。縦に考えろ、そして味方には上御一人をいただくのだ」と。その人は天皇陛下は中国とは相提携して、と言われているが、やつつけろ、いじめろとは言っていないと説明した。

中国でも兵火を出すなどというぐらいのことは言ったのですが、ちょうど「七月七日の事変記念日にはどんなことをやりますか」と副官が尋ねたところ「それは日本でお祝いするといってもビールを飲むくらいだろう。日本にとって記念日でも、中国にとっては屈辱の日、そんなことやらないで一つ雨乞いでもやれ」ということで、中国の住民は柳の枝を頭に軒先のカメに水を入れてお参りするのですが、日本式にと五千人位集まって山で火を焚いたら不思議なことに雨が降り出した。天気予報で事前に知っていたと思えますが、日本の大人は魔法を使うと言っていたとのことでした。

そんなことで旅団長が転任する時は、駅と駅の間八キロ位、住民が出て爆竹をたいて送ったということがありました。

日本と中国の間柄は、同種・同文であり、日本の道徳の根源は、儒教であり、日本人の思想の中には道德的なものがあります。我々日本人（特に戦前・戦中派）の心の中には、中国を侮る気持ちはなく、共に手を取り合って、アジアの再建に努力すべき同胞と思っていたのです。

私は、悲劇の第二十九師団の中であって、奇跡的に生き残った者であります。玉碎した多数の戦友の慰霊を欠かさず行なっている一人であります。

テニアン島戦記

降伏せず生き抜く

京都府 小川 米治
京都府 渡辺 達雄

海軍二三三設営隊という飛行場設営隊の、軍属・工員の軍事訓練指導と隊の庶務担当者の小川米治氏と、陸軍部隊の隊衛戦闘部隊の渡辺達雄氏のお二人は、陸・海、軍人・軍属の違いはあったが、京都府の綾部市と宮津市出身と同郷の土、共にテニアン島で任務につき、玉碎せず、降伏せず、それぞれの立場で生き抜いた奇跡の人生、奇遇の縁で相互の知られざる事実を語り合う体験談である。 聴取者 星 澤 實

海軍飛行場設営隊

私（小川）は、ウ第二三三部隊という設営隊に所属していた。約三百五十人の土工を主力とした隊である